

# みる つくる がたる

千葉県立美術館報

VOL. 17 NO.1

(通巻64号)

平成2年6月10日発行

編集・発行人 竹内一雄

〒260

千葉市中央港1丁目10番1号

☎0472-42-8311 (代表)



## 石井林響

### 「蓬莱仙境之図」

(絹本着色・一九二七年)

蓬莱は、中国の伝説で東海中にあって仙人が住み、不老不死の地とされる山です。高くそびえる霊峰、隆々たる山肌、その間を流れ海に至る川。全てを動きのある筆運で描いています。

作者林響は、画家として決して恵まれた歩みをしたとは言えません。明治41年師橋本雅邦の死後、画壇の主流である院展から離れ、次第に孤立化していきます。しかし、ひとり画趣を高め、中国の画家石濤に私淑し独自の南画の世界を表現しようとしました。

大正15年弧立の世界から自然との同化を求め、房総の閑地宮谷へ移住します。林響にとつて、最も充実していた時期でありました。しかし、その生活も、2年後の昭和4年5月突然の脳出血で崩れ去ります。奇跡的に回復に向いますが、翌年再び倒れ、45年の短い生涯を終えました。

この作品には、林響の求めた南画の世界が見事に展開しています。年記により昭和2年の作であることが判ります。この頃病魔の襲来を予測していたかの如く蓬莱山や桃源郷などの理想郷を主題とした数多くの作品を描いています。

(前川公秀)

県民の日  
記念事業

特別展

石井林響をめぐる画家たち

90・6・9(土)〜7・15(日)

石井林響、初め天風と号し、橋本雅邦に師事。一時期「西

の関雪、東の林響」と称され、その技量は高く評価されました。しかし、現在、この画家の名を知る人は少なくなりました。それは、林響が中央画壇から離れていったためと思われま

誕生から画家へ

林響は明治17年(一八八四)千葉市下大和田で農家を営む石井治郎助の3男として生まれました。3歳の時、かまどに落ち頭に火傷を負い、その傷を隠す為生涯総髪で通しました。旧制千葉中学(現、県立千葉高等学校)で、図画教師堀江正章に画才を見出され、明治33年母の死を契機に上京、東京美術学校に入るべく共立美術学校で洋画を学びますが、横山大観・下村観山、菱田春草の作品を見て感激し、日本画家になることを決意し

ます。

画家林響

明治34年、観山の勧めで橋本雅邦の門に入ります。たちまちその才能を発揮し、二葉会・研精会などの展覧会に出品し、受賞しました。明治40年文展開設に伴う審査員任命の紛争により新派系小会派の大同団結で組織された国画玉成会に、雅邦塾二葉会の代表として参加。雅邦の狩野派の画法を基礎に、洋画からの写真と構図を取り入れた画風に、画壇の若手リーダーとして活躍しています。しかし、この着実な歩みは、明治41年の雅邦の死を境に乱れ始めます。同門たちが次々に去った二葉会を林響は守り続けます。再興院展に院友として推挙されますが、安田靉彦・小林古径らが重視されていくなか、林響は次第に離れて行きます。一方、官展へも断続的にしか

出品せず、中央画壇から孤立して行きます。新奇を追いつぎ墮落して行く画壇から離れ、自らの画趣を高め、独自の画風の確立をめざし、中国清代の画家石濤に私淑し、南画に傾倒しはじめます。

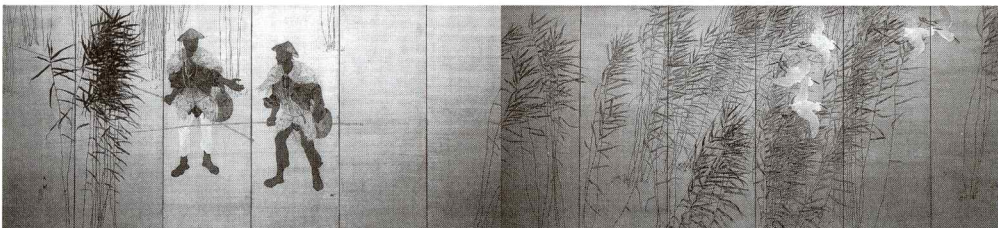
画壇への再起

大正7年、第12回文展から久びさに官展への出品を行います。翌年の第1回帝展では、号も林響と改め、「劉阮天台を、10年の第3回帝展には「総南の旅から」を出品し、好評を得ます。第4回帝展の「林の中」で推薦となり、画家としての地位を確立します。しかし、一方では大正10年山内多門・勝田蕉琴・島田墨仙ら気心の知れた10名の仲間と結成した如水会が、わずか2回の展覧会を開催しただけで解散しています。至純の交友関係で組織した如水会の分裂は、林響を一層孤立化させ、

大正12年の父の死も重なり、煩わしい世界から逃れ生地房総の大網白里町宮谷に移住する決意をします。

宮谷での晩年

大正15年、東京から大工を連れ画室を新築します。この画室は、飼育されていた白鵝に因み「白閑亭」と名付けられました。独自の画風をめざし意欲的に描き、生涯の中で最も盛んな創作時期であったようです。特に、自然と同一化し、題材として、昭和2年第8回帝展に「野趣二題」を出品しています。叢生する梅枝に鳴き遊ぶ小禽の楽しさ、池中に遊ぶ魚類の楽しさを画面いっぱいに表現し、自然と共に生きようとする林響の心境を、躍動的な線で描き上げています。しかし、この幸福な生活も長くは続くことなく、昭和4年3月突然脳出血に襲われ、一時危篤状態になりま



「白 映」



す。奇跡的にも快方に向かい、再び描くことに情熱を傾けますが、翌5年（一九三〇）2月またもや脳溢血で倒れ、同月25日死去しました。45年間の画家としての短い生涯でした。

### 展覧会について

今回の展覧会では、林響の生涯にわたる作品一六三点をはじめ、洋画・書・陶器などの資料もあわせて展示します。林響の作品は、今日まで余り見る機会はなく、その為忘れられた画家となりつつありますが、この展覧会を通し、林響が近代日本画の歩みの中で

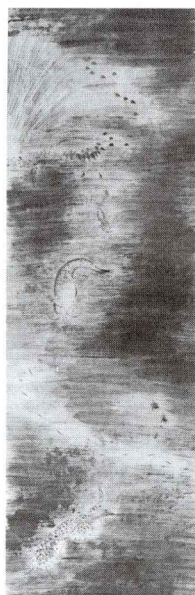
果たした役割を回顧しようとするものです。

また、林響と関係の深い画家のなかから、師橋本雅邦をはじめとし、同時期共に活躍した下村観山・今村紫紅・前田青邨・小林古径・安田靉彦・島田墨仙・山内多門・勝田蕉琴・橋本閑雪、また画風が似ている平福百穂の作品も紹介します。

（前川公秀）

### 〔観覧料〕

一般 五〇円（三〇円）、高大学生 三〇円（二〇円）、小・中学生 二〇円（七円）（一）は三名以上の団体料金。なお、県民の日は無料です。



「野 趣 二 題」

房総の美術家シリーズ 20

## 鈴木方鶴展

90.9.13(木)~10.14(日)

房総の美術家シリーズは、房総に生まれ、あるいは定住して活躍し、美術振興に貢献した美術家の再発見と顕彰をめざし行ってまいりました。第20回を迎えた今年度は、本県書道界において活躍した書家・鈴木方鶴をとりあげ実施します。

鈴木方鶴（本名憲一）は、大正7年（一九一八）に香取郡山田町に生まれ、千葉師範学校（現千葉大学）に学び、同校在学中に書を浅見喜舟に学び号を受けました。卒業後小、中学校の教員、さらに昭和24年から県立千葉第二高等学校（現千葉女子高校）

に定年までの30年間勤務し、そのかたわら書に打ち込み多くの後進を育てました。

県展をはじめ毎日書道展、日本書道美術院展を主舞台に活躍し、千葉県展知事賞のほか日本書道美術院展では、昭和60年に「一笑千山青」がオリベッティ国際賞を受賞するなど、数多くの荣誉に輝いています。

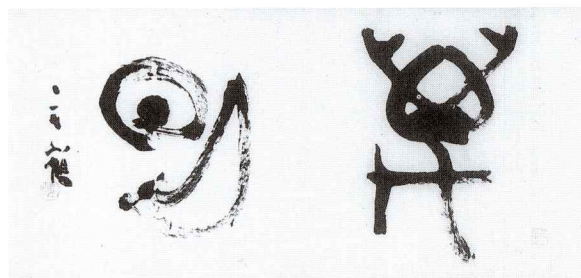
書の古典を唐代までとして常にその追求に努め、特に六朝時代に焦点を置いてその研究を深め、優れた臨書を残しています。

一方、中林梧竹や比田井天来、渡辺沙鷗らに私淑しましたが、中でも日下部鳴鶴の高弟である渡辺沙鷗には、昭和16年、師事した田代秋鶴宅に掲げられていた「触目会心」という書によって出会い、その後の書作に大きな影響を受けたといわれています。沙鷗の研究に情熱を傾け、後にその成果を大著「渡辺沙鷗作品集」に結実させ、書道史研究にも優れた業績を残しています。

本展覧会は、鈴木方鶴の作品約70点、その他関係資料を一堂に展示し、その偉業を回顧します。



「一笑千山青」



「万 昌」

平成2年度  
常設収蔵作品展

常設収蔵作品展では、本館が所蔵する日本画・洋画・彫刻・工芸・書作品を紹介し、年間を通して行っております。本年度は4期に分け、次のように実施いたします。

第1期 4月1日～7月15日  
(一部、6月3日まで)

第2期 7月17日～10月14日  
(一部、9月9日まで)

第3期 11月17日～12月24日  
第4期 2月16日～3月31日

なお、各期間とも主として2つのコーナーに分け作品を展示する予定です。

そのひとつは、モチーフ、あるいは素材・技法など種々な角度からテーマを設け展示いたします。ここでは同じモチーフによる作家の表現の違い、素材による表情の違いなど作品制作の可能性と多様性を鑑賞いただけます。

もうひとつは「特設コーナー」と称し、鑑賞の希望の多い作品のうちから、ミレー・コロ・クールベなどの作品を公開いたします。なお、この他1月6日からの『浅井忠記念賞展』期間中には「浅井忠コーナー」を設置いたします。

第14回  
千葉県移動美術館

優れた美術作品を、より多くの方々に鑑賞していただくため、毎年、県内2会場を巡回して展覧会を開催しています。日本画、洋画、彫刻、工芸、書、版画の各分野から収蔵作品を中心に展示します。今年度の会場と会期は次のとおりです。

八日市場市立公民館  
11月20日(火)～12月2日(日)  
栄町役場町民ギャラリー  
12月5日(水)～12月18日(火)

本館は、開館以来、日本近代洋画の先駆者で、リアリズムの追求を続けた千葉県出身の洋画家・浅井忠の画業を顕彰することに努めてきました。この間、昭和59年に美術館開設10年記念事業として、浅井忠の精神を現代に生かし、また、現代美術の振興に寄与するため、公立美術館としては初の試みである全国公募による「浅井忠記念賞展」(昭和59年1月14日～2月22日)を開催し、多大な評価を得ることができました。この実績をふまえ、第2回展を次のとおり開催することとなりました。

第2回浅井忠記念賞展  
作品公募のお知らせ

特別展  
マリイ・ローランサン(仮称)

マリイ・ローランサン(一八八五～一九五六)は、はじめブラックやピカソらの影響を受けつつ、女性特有の感覚で独自の画風を築きました。柔らかな色調で夢見るような詩情の世界は、近代感覚の一つの典型と言えます。

このローランサンの芸術に焦点を当てた特別展を平成3年2月16日(土)から3月24日(日)まで開催します。詳細は次号でお知らせします。

■応募資格  
出身県、経歴、年齢を問いません。

■応募作品  
具象的傾向の洋画作品  
■作品搬入日  
平成2年11月16日(金)～18日(日)

■賞・入選  
大賞1点、優秀賞3点、及び入選(点数未定)  
■会期  
平成3年1月6日(日)～2月11日(月)

■会場  
千葉県立美術館  
千葉県立美術館  
応募要項等の請求、詳細は学芸課にお問い合わせ下さい。

新収蔵作品紹介

平成2年2月1日から3月31日までに収蔵された作品を紹介いたします。

寄贈

御寄贈いただいた作品は次のとおりです。ここに厚く御礼申し上げます。

〔洋画〕

足立朗氏より  
足立源一郎作

「水郷初夏」(中州) (2)  
(油彩一九五)

「水郷初夏」(中州) (3)  
(油彩一九五)

〔書〕

千代倉胖氏より  
千代倉桜舟作

「宗左近の詩」(屏風一九六)



足立源一郎「水郷初夏」<十二橋>

購入



今関 啓司「浅春山路」

〔洋画〕

足立源一郎作  
「津久波山」(水郷中州)

(油彩一九五)

「水郷初夏」(十二橋)

(油彩一九五)

「水郷初夏」(中州) (1)

(油彩一九五)

大野隆徳作

「公園」(油彩一九二)

今関啓司作

「浅春山路」(油彩一九四三)

陰里寿朗作

「構造上の森」(街かもしれない)

(鉄・ステンレス一九六)

〔工芸〕

香取秀真作

「千本松文釜及び鳳凰文風炉」(銅金)



かたる・つくる

情報資料室だより

寄贈図書を紹介

千葉市在中の鈴木満平氏から昭和60、61年度に続き、今年度も展覧会図録150冊を寄贈頂きました。図録は展覧会の記録であり、会期以外には二度と入手できないものが多く非常に貴重な資料です。鈴木氏は熱心な美術愛好家で寄贈された図録の展覧会は全て御本人が御覧になったものとのこと。厚く御礼申し上げます。



展覧会関係

図書の御案内

情報資料室では展覧会に係した資料として以下のものをそろえています。展覧会鑑賞と共にぜひ御利用下さい。

●石井林響 関係

「画生活随筆」140頁、149頁

この本はアトリエ誌にかつて寄稿した美術家達の随筆等を編集した本です。無類の鳥愛好家だった林響は、この中で少年の日の白文鳥との出会いから始まって、

(講演会・実技講座等)

自身の成長と共に住ごしたカナリヤ、おうむ、白鷺、白鷺ほかの鳥達との思い出の日々と、楽しい発見の数々を画家独特の鋭く、ユニークな眼で表現しています。

「近代文人画、悠々たる美」BSN新潟美術館で開かれた展覧会の図録です。

ほかに、「アトリエ」「美術」「美術新報」等の美術雑誌や本館発行の「房総の美術史」にも掲載されています。

●鈴木方鶴 関係

「鈴木方鶴作品集」

書を極めて40年余りの年月を経た著者の第6回目の個展にちなんで出版されたものです。

「鈴木方鶴遺墨集」

氏自ら生前に、遺墨展の際に出品してほしいと書き残して用意してあった9点の作品を初め全120余点で構成されています。作家の活動の全貌を物語る一冊です。

利用案内

情報資料室は、活用する方法によって様々な楽しみ方や学び方ができます。以下にその

利用方法について紹介します。●資料を捜す時は、カード目録をひいて下さい。

(1) 資料が図書の場合

書名・人名・内容から調べる事ができます。人名は著者をさす場合と本文中の人物をさす場合との両方を兼ねています。内容は、美術一般・絵画・版画・書・彫刻・工芸・デザイン・写真に大別し、それをまた辞典・便覧・図集・理論・発展史(地域・時代別)・作家別(作品・伝記・著述)・材料・技法、題材別・教育・政策ほかに分類しています。書棚には、体系別に並んでおり、ラベルナンバーから捜すことができます。

(2) 資料が図録(展覧会カタログ)の場合

図録は公開していませんが、カード目録を御覧いただき、希望があればお見せします。書名・人名・件名・団体展に分類しています。

(3) 資料が雑誌の場合

誌名・発行年月、号数から調べる事ができます。

(4) 資料が新聞の場合

新聞記事のスクラップは過去10年に渡り用意しています。年度別に、内容を県内展・県外展・美術評論・作家情報・施設モニメント関係等に分けて記事を網羅しています。

(5) 資料が年報・紀要・収蔵品目録の場合

それぞれ、発行機関名と号数から調べる事ができます。

(6) 本館に作品を収蔵している作家について知りたい場合

その作家に関する新聞記事や関係記事を掲載している雑誌・ポストカード・ポスター・小冊子等、御覧頂けます。

(7) これから始まる、もしくは開催中の展覧会、個展、興味深いイベントについて知りたい場合

室内及び資料室前のロビーでは、ポスター・チラシ・ポストカード・情報誌等を公開しています。

開館日 火・金(祝日を除く) 12時半～4時半、貸出し、コピーサービスは行っています。

美術講演会

本年度は、各展覧会に併せて美術講演会を5回実施します。

ここに、すでに決定している特別展「石井林響をめぐる画家たち」及び企画展「鈴木方鶴展」の開催期間中における3つの講演会を御案内します。

ぜひ多くの方々に御参加いただき、美術へのより一層の興味と理解を深める機会としていただければと思います。

第1回

日時 6月16日(土) 2時

演題 「石井林響とその時代」

講師 細野正信氏

第2回

日時 7月7日(土) 2時

演題 「南画と近代日本画」

講師 鈴木進氏(美術評論家)

第3回

日時 9月22日(土) 2時

演題 「鈴木方鶴さんのこと」

講師 高澤南総氏(書家)

※いずれも会場は本館講堂で参加者数は二百名を対象としています。聴講料は無料。

美術館実技講座

●日本画講座

期日 6月19・20・21・23・24・28・29・30日  
7月1・3・4・6日  
(12日間)

講師 斉藤 惇氏  
定員 20名 締切 6月5日

●洋画講座(2)

期日 8月28・29・30・31日  
9月4・5・6・7・8・9日  
(10日間)

講師 小林 数氏  
定員 30名 締切 8月14日

●書芸講座

期日 9月19・20・22日  
(3日間)

講師 高木 東扇氏  
定員 25名 締切 9月5日



陶芸講座

ごあんない・実技講座

●陶芸講座(2)

期日 10月23・24・25日  
11月20・21・22・23日  
12月18日・1月11日  
(9日間)

講師 鎗田 和平氏  
定員 30名 締切 10月9日

●書芸講座(2)

期日 11月27・28・29日  
(3日間)

講師 中村 象閣氏  
定員 25名 締切 10月13日

●彫刻講座

期日 11月3・4・6・8・10・11・13・14・17・18・20・23日  
(12日間)

講師 酒井 良氏  
定員 15名 締切 10月19日

●版画講座(2)

期日 11月27・28・29日  
12月1・2・4・5・6・7・11・12・13日  
(12日間)

講師 牛玖 健治氏  
定員 20名 締切 11月13日

友の会実技講座

◎洋画入門講座(1)

期日 6月22・23・24・26・



洋画講座

◎デッサン入門講座(1)

期日 27・28日 (6日間)  
講師 五十嵐 光昭氏  
定員 30名 締切 6月8日

◎洋画入門講座(2)

期日 7月24・25・26・27・28・29日 (6日間)  
講師 根岸 茂行氏  
定員 30名 締切 7月10日

◎洋画入門講座(3)

期日 12月1・2・4・5・7・8日 (6日間)  
講師 松沢 茂雄氏  
定員 30名 締切 11月17日

◎洋画入門講座(4)

期日 1月27日  
2月3・10・11・17・24日 (6日間)  
講師 天野 三郎氏  
定員 30名 締切 12月13日

◎デッサン入門講座(2)

期日 8月22・23・25・26日  
(4日間)  
講師 根岸 茂行氏  
定員 30名 締切 8月8日

◎デッサン入門講座(2)

期日 10月25・26・27・28日  
(4日間)  
講師 五十嵐 光昭氏  
定員 30名 締切 10月11日

○日程、内容は変更する場合があります。

〈申込み方法〉

住復はがきに、講座名、住所、電話番号を明記のうえ、美術館講座は美術館普及課、友の会講座は、美術館友の会事務局まで。

日誌抄

- 2・10 第10回美術を語る会 (講師・南部治夫氏)
- 3・13 展示室利用団体事前会議
- 3・23 学校巡回展会議
- 4・1 常設収蔵作品展第1期 (7/15)
- 4・2 新職員着任
- 5・17 千葉県博物館協会役員会・総会

職員異動

平成2年4月1日付で、次の職員が異動しました。

◆退職者

中地 昭男 (研究員)

◆転出者

池田 伊予 (研究員→千葉市立更級中学校)  
小泉 幸代 (主任技師→文化国際課文化財主事)

●転入者

佐久間芳夫 (文化課主幹→副館長)  
神尾 吉夫 (千葉市立千城小学校→研究員)  
藤川 正司 (文化課文化財主事→学芸員)  
中村 博史 (千葉市立白井小学校→研究員)

◆新採用  
中松 れい (技師)

訂正

平成元年11月13日発行・通巻62号のVOLが間違っておりました。VOL17をVOL16にご訂正方よろしく願います。